

社会的スキル向上を促す体育授業の実践研究

—生涯スポーツにつながる体育授業の実践研究—

福田 晴夏^{*1}・茗荷谷武弘^{*2}・栗田 克弘

The practice research of physical education class to promote social skill

FUKUDA Haruka^{*1}, MYOUGATANI Takehiro^{*2}, KURITA Katsuhiko

(Received August 5, 2019)

キーワード：社会的スキルの向上、体づくり運動、責任学習モデル、段階的な学習過程、生涯スポーツ

はじめに

平成29年告示の中学校学習指導要領は、変化の激しいこれからの時代を生きる力を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の視点にたった授業改善を行うことを述べている。これに関する文献や記述は多く、すでに多くの学校現場で実践されている。筆者は2年間の学校実習を通して、その実現のためには、良好な人間関係の学びに向かう学習集団が必要であると感じた。田熊(2016)も、知識やそれを応用するための思考力や社会的能力があっても、人間性や人間関係・社会が良好でないと行動につながらないとしている。

体育は、学校教育の一環として、スポーツ文化の継承・発展と人間形成という基本的な教育の目的を担っている。友添(2010)が示す5つの体育科目標においても「人間関係能力の育成や学習者の社会化、態度形成に関わる社会的な目標」がある。そのため、体育の授業で子どもの社会性を育成する先行研究も多く存在する。筆者が参考にしたものは、梅垣他(2006, 2011, 2016, 2017)の研究である。これらの研究は、菊池(1988)の社会的スキルとHellison(2003)の責任学習モデルを融合させたものである。梅垣他(2011)によって責任学習モデルが中学生の社会的スキルを向上させることが明らかになった。梅垣他(2016, 2017)では、仲間づくりに関する知識の教授やチーム編成などの外的要因が社会的スキル向上に有効であると示された。

1. 研究目的

筆者は、指導者が生徒に仕組む外的要因のほかにも、生徒自身の内的要因も社会的スキルの向上に影響しているのではないかと考えた。そのため、本研究では責任学習モデル(梅垣(2011))の授業方略をもとに、生徒の社会的スキルの向上を促す体育授業づくり検討し、授業戦略に基づく外的要因と生徒自身や集団の特性による内的要因を明らかにしていくこととした。また、社会性が高まれば、集団的・協力的な関わり合い活動が活発に行われるため、仲間と運動を楽しむことにつながるのではないだろうか。運動を楽しむことは、生涯にわたって運動を親しむための第一歩となるため、体育の授業で生涯スポーツ実践者を育成することにつながるのではないかと考えた。したがって、本研究の目的は、「生徒の社会性を育成する要因を明らかにし、運動の楽しさや喜びを実感させることで、生涯にわたって運動に親しむ態度を育成する」とした。

2. 事前調査

社会的スキルを測定する尺度として「KiSS-18テスト」(菊池(1988))を使用するが、その結果と授業態度や学校生活との関連や中学生の学年や性、学校による社会的スキルの差に関して明記されている先行研

*1 山口県立田部高校(平成30年度山口大学教育学研究科教職実践高度化専攻教育実践開発コース) *2 山口市立白石中学校

究は無かった。そこで、授業実践を行う前に実習校の社会的スキルの実態を調査することで、体育授業と社会性の関連を検討し、より効果的な授業実践に繋げることを目的とした。

菊池(1988)が作成した「KiSS-18テスト」は、社会的スキルを測定する心理学のテストである。18項目で構成された5件法の質問紙であり、「いつもそうだ」を1点、「いつもそうでない」を1点とし、合計点(最高90点、最低18点)で測定する。中学生以上に適用可能であることが確認されている。社会的スキルは、「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル(技能)」と定義され、①対人関係に関わるスキル、②感情を処理するスキル、③対人関係を維持するスキル、④ストレスを処理するスキル、⑤仕事を進めるスキルに分類され、単にコミュニケーション能力だけではないことがわかる。

対象は山口市立白石中学校の1年生の1クラスを除く全校生徒252名と、山口県内の公立中学校A校の3年生119名、計371名、期間は白石中学校においては2018年5月、A校においては2018年7月に、いずれも保健体育教諭の協力のもと、保健体育の授業内で実施した。「Kiss-18テスト」の結果と子どもの体育授業中の姿の関連の検討は、山口市立白石中学校の全校生徒を対象とし、調査期間は、2018年6月から2018年7月の体育授業とした。分析には、Microsoft Excel 2010を使用し、有意水準は5%とした。

結果として、本事前調査における「Kiss-18テスト」では以下のことが示された。すなわち、「Kiss-18テスト」で測定した社会的スキルは、第1に学年による有意な差はみられなかったこと、第2に学校による有意な差は認められなかったこと、第3に性別による有意な差は認められなかったこと、第4に運動習慣の有無による有意な差が認められたこと、第5に社会的スキルと睡眠時間に相関は見られなかったことであった。このように、中学生期における社会的スキルに影響を及ぼすのは、日常生活において継続的に運動する習慣があるかどうかであることが示唆された。また、事例的な結果として、本事前調査における観察調査では以下のことが示された。すなわち、社会的スキルが高い生徒の体育の授業内における行動の特徴は、第1に友人とのコミュニケーションが多いこと、第2に分からないことがあればすぐに教師に尋ねること、第3に友人に指示を出せることであった。以上より、中学生の社会的スキルは運動習慣の有無が影響すること、運動・スポーツの特徴である「仲間と集団的・協力的な関わり合い活動」を授業に仕組むことが、体育授業で生徒の社会的スキル向上につながることの2点が事前調査で明らかとなった。

3. 方法

本研究は、山口市立白石中学校第1学年の生徒64名(2クラス)を対象に、筆者自身が指導した体育授業を対象とした。両クラスによる差は付けずに、同じ授業を実施した。実習校の目指す生徒像や平成30年度の重点取組事項から、本研究のテーマと目的は学校目標とも関連しており、実情に沿っていると言える。実施期間は、2018年10月から2018年11月であり、原則毎週水曜日に週1時間ずつ6時間1単元の授業を実施した。

授業単元は、先行研究でも扱われその有効性が明らかになっており、仲間との協力を必要とする運動を仕組みやすいことから「体づくり運動」を選定した。授業戦略は、①責任学習モデルを取り入れること、②社会的スキル向上のためのねらいを段階的に示すこと、③仲間との協力が必要な運動を段階的に仕組むことの3つである。

責任学習モデルとは、数ある体育指導モデルのうちの1つでありアメリカのHellison(2003)が提示するものが代表される。「責任レベル表」に社会的責任の目標をレベル0からレベル4までの5段階で示し、授業の中で運動学習の目標とともに意識させる方略をとる。レベル0は、無責任な状態で、授業に積極的に参加しない、授業の邪魔をするような行動がみられることである。レベル1は、友だちの権利と感情を尊重することに関わり、学習の邪魔をしないことや友だちとのけんかを平和的に解決することなどが目指される。レベル2は、参加と努力に関わり、活動の継続や新しい事柄に挑戦することなどが目指される。レベル3は、自己管理に関わり、教師から権限が与えられ主体的に学習に取り組むことなどが目指される。レベル4は、友だちに対する思いやりに関わり、積極的に友だちと協力したり励ましたりすることなどが目指される。責任レベル表はチェックの数に応じて得点化できるようになっているため、合計点により学習の定着を見とることができる。

また、「体育科のねらい」に加え「仲間づくりに関するねらい」を順次的に設定した。単元の1時間目のねらいは「相手を思いやる」で、自己から他者(相手)へ目を向けさせることを意図した。単元の2時間目

から4時間目までのねらいは、「仲間と協力する」「仲間の声を聴く」「集団の空気をつくる」とし、集団で活動するために必要なことを意識させることを目的とした。単元の5時間目並びに6時間目のねらいは「仲間や集団に対して必要な声を出す」とし、よりよい集団をつくり、よりよい活動をするを目的とした(図1参照)。

そして、扱う教材は長縄を核とする仲間との協力が必要な運動を選定した。また、集団が大きくなったときの仲間との協力を学習させるために、授業時数が重なるにつれて2人から15人と活動人数が段階的に増えるよう設定した。これは、まずペアでの活動を通して他者を意識することから、小集団における協働、大集団における協働を学習できるように意図した。

本研究の評価項目は、単元前後の「KiSS-18テスト」、振り返りシートとして毎授業の最後に記入した責任レベル表、同様に振り返りシートの項目である授業感想の自由記述、そして単元の最後に行った「体づくり運動」の感想の自由記述とした。

単元名 体づくり運動 (中学校第1学年) 10月~11月

	社会的スキル向上のねらい	体育科のねらい	教材	活動人数 <学習内容・授業者の意図>
1	相手を思いやる	体と心の関係に気づく	ペアストレッチ、体じゃんけん、エレベーター、背中合わせ、算数鬼ごっこ	2人 思いやりを体現する 難しさ
2	仲間の声を聴く 仲間と協力する 集団の空気をつくる	・体の柔らかさ ・巧みな動き ・力強い動き を高める運動の 学習	背中合わせ(4人)、背筋バランス、ボール転がし、背筋ボールよけ	4~8人 個人よりも集団を優先 する心 リーダーの声 発言しやすい空気 傾聴する
3			背筋ボールよけ、ボールつき	8~全員
4			グループじゃんけん、背中合わせリレー	4人
5	仲間や集団に対して必要な声を出す	・動きを継続する能力 を高める運動 の学習	長縄(8の字跳び、交互8の字跳び、5人中に入って跳び、全員跳び)	15人 集団において自分に できること探す 全体に視野を向け、 課題を解決する
6				15人

図1 社会的スキル向上のための授業戦略

4. 社会的スキル向上を促す体育授業実践

3章で述べた授業計画のもと、白石中学校第1学年a組32名(男子16名、女子16名)とb組32名(16名、16名)の計64名に授業を実施した。

時限	1	2	3	4	5	6
ねらい	体ほぐしの運動 相手を思いやる	仲間と協力する	集団の空気をつくる	体力を高める運動 仲間の声を聴く 必要な声を出す		
0分	社会的スキルテスト	準備運動				
10分	準備運動	体力を高める4要素の確認	体でじゃんけん	グループじゃんけん	必要な声とは	
	学習の進め方 ストレッチ	ストレッチ(ペア)	背筋ボールよけ			
20分	体でじゃんけん エレベーター 背中合わせ 算数鬼ごっこ	背中合わせ 背筋バランス ボール転がし	ボールつき	背中合わせリレー	長縄 ・8の字 ・交互8の字 ・常に5人で跳ぶ ・全員で跳ぶ	
30分		背筋ボールよけ				
40分	本時の学習で必要な声とは					
50分	ふり返り記入					
	次回の確認、挨拶					
	着替え					

図2 単元計画

1時間目は、授業前の生徒の社会的スキルを測定するために、まず「KiSS-18テスト」を実施した。本時のめあてを「体と仲間と対話し、体と心をリラックスさせよう」とし、主に2人組で行う運動を扱うことで「相手を思いやる」ことを学習のねらいとした。体ほぐしの運動の目的である心と体の関係に気づくために、体を動かすことが心のリラックスにつながることを味わえるようにした。

まず、ペアでストレッチとして「肩ほぐし」や「肩のストレッチ」を行った。力任せに振り回すなど強引に力を加えてしまっ
ては、相手が痛い思いをしまい心のリラックスにつながらないため、優しく行うことを意識させながら行った。

次に、「体でじゃんけん」を行った。グーはしゃがみ、チョキは腕を真上に伸ばして立ち、パーは大の字に大きく体を広げる。体を大きく動かすことで心のリラックスを図った。負けた人は腹筋を行うなど、ゲーム性を高めることで意欲的に取り組めるように工夫した。

そして、「エレベーター」を行った。これは、ペアでつま先を合わせて向かい合い、両手を持って膝を合わせながら、徐々にしゃがんでいくものである。両者の力が均等に釣り合ったとき成功することができる。相手が途中で手を離すと後ろに倒れ怪我につながる恐れがあるため、相手を信頼することが重要になる。そのため、「相手に信頼してもらうための言動」を意識させた。

更に、「背中合わせ」を行った。背中合わせは「エレベーター」同様、両者の力の釣り合いが大事になる。しかし、背中を合わせているため相手の顔を見ることができず、難易度は高くなる。これも相手を信頼し、顔が見えない中でどのようなコミュニケーションをとっていかかが鍵となる。途中でめあてを振り返る時間を設け、「相手の心をリラックスさせるための配慮」について考える時間を設けた。成功したペアには、次のステップとして「腕を組まずに背中合わせで立つ」を提示し、段階にあった活動ができるようにした。

最後に、「算数鬼ごっこ」を行った。ペアで足裏を合わせて向き合って長座になり、片方が偶数、もう片方が奇数となる。教師が簡単な四則演算の問題を出題し、その答えが該当する方がコーンまで逃げるものである。生徒は、体で感情を表現するなどして盛り上がっていた。

2時間目は、本時のめあてを「体と仲間と対話し、体の動きを高めよう！」とし、前時より人数を多くしたグループで取り組むチャレンジ運動を扱うことで「仲間と協力すること」を学習のねらいとした。本時より体力を高める運動となるため、代表される4つの能力「力強い動き」「体の柔らかさ」「巧みな動き」「動きを持続する能力」を確認しながら行う。

まず、めあての確認と体力を構成する4つの能力についての学習を行った後、「下肢のストレッチ」を行った。前時同様、相手を思いやることを意識させ相手の状態や気持ちを伺いながら行った。生徒は相手の状態を伺いながら取り組んでいた。

次に、グループで協力することに意識を向かわせるために前時にも取り入れた「背中合わせ」を行った。2人で行ったのち4人組にも挑戦した。2人よりも難易度が上がり、苦戦するグループも多かった。しかし、2人でやるときよりも、多くのコミュニケーションが生まれ成功・失敗に関わらず協力しようとする姿勢がみられた。

次に、「背筋バランス」を行った。これはペアで行い、一



図3 体でじゃんけん



図4 エレベーター



図5 背中合わせ (2人)



図6 算数鬼ごっこ



図7 背筋バランス



図8 まっすぐボールを転がそう

人が四つん這いになり、その上に俯きなって乗り地面と平行になるよう手足を伸ばす運動である。「力強い動き」を高める運動であることを確認した。

そして、「まっすぐボールを転がそう」を行った。体育館のラインを活用しながらバレーボールやバスケットボールをまっすぐ転がす運動である。巧みな動きを高める運動に該当し、他者の観察や相互のアドバイスを通して上達していった。

最後に、「背筋ボールよけ」を行った。これは、「力強い動き」と「巧みな動き」を組み合わせた運動で、これまでに行った「背筋バランス」、「まっすぐボールを転がそう」の動きと仲間との協力が必要となる。一人が投球者、残りがうつ伏せの状態で一列に並び、投球者が転がしたボールを背筋で避ける運動である。最初はテニスボール、次にバレーボール、バスケットボールとボールの大きさを大きくすることでステップアップを図った。息を合わせることが求められるため、自然と協力するような運動になっている。

6～7人グループから男女に分かれた約15人で行った。人数増加により難易度は上がるが、チームで協力できていた。最後に、ふり返りシートの記入を行った。

3時間目は、めあてを「仲間と協力しやすい集団の空気づくり」を学習のねらいとした。これまでの学習で相手や仲間を思いやることや仲間と協力することを学んだため、「協力」に焦点を当て、協力しやすい空気づくりに必要なものを考えることにした。本時は、自然発生的なリーダー（指名されずとも集団に対して必要な指示を出せる人）が現れる場面を設定し、リーダーが発生しやすい空気に視点を向けられるように工夫した。

まず、「体でじゃんけん」でほぐし運動を行った後、協力する雰囲気を醸成するためにクラス全員で「背筋ボールよけ」を行った。

次に、自然発生的なリーダーの出現を意図して「ボールつき」を行った。この運動は、一人一球ボールをつき、合図とともに一斉に隣の人のボールへ移動しそのボールをつくという運動である。「せーの」や「1、2、3!」、「いくよー」や全体としてこうしようなどの指示が必要不可欠となる。最初は男女混合の6～7人のグループで行い、成功したグループ同士が合体して15人程度のグループとなって挑戦した。生徒たちは成功するために、声かけや並び順など様々な工夫をしていた。

最後に、声を出した人（リーダーとなった人）を尋ねたところ、クラスの約半数が手を挙げた。これだけ多くの人が声を出せたのは、「声を出しやすい空気」を作った全員の協力する姿勢によるものであることを説明し、価値づけを行った。そして、ふり返りシートの記入をした。

4時間目は、本時のめあてを「体と仲間と対話しながら、集団の空気をつくろう!」、「仲間の声を聴く」を学習のねらいとした。仲間の声をしっかり聴く姿勢が、いい声や発言しやすい雰囲気づくりにつながることを話し、本時の目標と



図9 背筋ボールよけ①



図10 背筋ボールよけ②



図11 背筋ボールよけ③



図12 背筋ボールよけ④



図13 ボールつき



図14 グループじゃんけん

した。

そのために、必然的にグループでの話し合いが必要となる「グループジャンケン」を行った。この運動は、4人1組で行うじゃんけんで、全員が立ったらパー、全員がしゃがんだらグー、交互に立つしゃがむことでチョコキとなる。事前にグループで何を出すか話し合い、並びから自分の動きを考えることになる。あいこの場合も想定されるため、一度の話し合いで3通りほどの手を考えなければならない。また、1人だけ立つ(しゃがむ)、交互になっていない場合はその時点で負けになるため、入念な話し合いが求められる。生徒の意欲を高めるため、どのチームが先に3勝するか競わせた。積極的に活発な話し合いが行われ、楽しみながら運動することができていた。

次に、「背中合わせリレー」を行った。この運動は、前向きに走る人と後ろ向きに走る人がいるため、仲間の声に耳を傾け、転倒しないようにする必要がある。リレーという競い合いの状況で、めあての「仲間の声を聴く」ことができるかが重要になる。めあてに立ち返りながら授業を進めることで、仲間の声に耳を傾ける姿がみられた。

最後に、「聞く」と「聴く」の違いについて話をし、ふり返りカードの記入を行った。

5時間目は、本時のめあてを「課題達成のために仲間や集団に対して必要な声を出そう」、「集団における自分の役割を見つけ、状況に応じた必要な声を出すこと」を学習のねらいとした。そのための教材として長縄を採用した。長縄は仲間づくりに適した教材であり、学活の時間などで学級づくりに使用されることが多い。体育科としては、集団づくりもでき、また十分な運動量を確保できるため優れた教材であるといえる。必要な声をかけ合うことが成功のポイントとなるため、必要な声の種類が増え、役割分担が求められる課題を段階的に提示することとした。

まず、「必要な声」とは何かを学習した。生徒の経験に基づく具体例を示し、状況や集団のレベルによって必要な声に変化することを話した。その上で、長縄の課題達成のために仲間や集団に対して必要な声とは何か考えながら本時の活動に取り組むことを意識させた。

男女比が同じになるように無作為にクラスを2チームに分け、最初の課題として8の字100回を提示した。8の字は、得意な人が一定のリズムを保ちながら跳び続けることが成功の鍵となる。50回を超えたところからの緊張感と100回跳べた時の達成感がチームに一体感をもたらすため、次の課題へつなげやすくなる。主な「必要な声」は、回数を数える声、入るタイミング、並び順に関する声、縄に関する声である。

ステップアップの課題として常に5人入って跳ぶ運動を行った。この課題は、跳びながらの移動や跳びにくい場所で跳び続ける技能が求められるため、8の字と比較して難易度が高くなる。自分のことだけでなく、仲間が跳びやすいように待っているときの行動が成功の鍵となる。主な「必要な声」は、人数を数える声、全体のバランスを調整する声、並び順、入りと出のタイミングに関する声である。生徒は、課題達成のために仲間とともに試行錯誤を繰り返しながら、様々な工夫をして活動に取り組んでいた。

常に5人で跳ぶ運動をクリアしたチームには、難易度を上げた次の課題を与えた。一人ずつ縄に入っていく全員が縄に入ったところから20回跳ぶものである。最初に入った人は長く跳ぶ必要があるため、並び順を考える活発な話し合い活動がみられた。運動量も上がるため、汗だくになりながらも何度も挑戦する姿がみられた。

最後はいつも通りふり返りシートでの記入を行った。しかし、本時の「感想・気づき」の自由記述欄は、本時の取り組みの中で出た「必要な声」やこんな声があったらよかったと思う「必要な声」を記述するよう指示した。



図15 背中合わせリレー



図16 長縄（8の字）



図17 長縄（常に5人で跳ぶ）

6時間目は、本時のめあてを前時同様、「課題達成のために仲間や集団に対して必要な声を出そう」、「集団における自分の役割をみつけ、状況に応じた必要な声を出すこと」を学習のねらいとした。2クラスとも前時の課題をクリアしたチームはなかったため、再挑戦を目指しチームを再編して行った。本時のチーム分けも前時同様、無作為に編成した。

前時のふり返しシートにて生徒が記述した「必要な声」を予めホワイトボードに記しておいた。予め記したことで、自分の書いた声を探するなど生徒の興味を引き付け、授業への意欲を高める効果があったように感じられた。生徒の記述をもとに、長縄における「必要な声」を再確認し、意識付けを行った。本時は前回の「必要な声」を活かすとともに、新たな声を見つけることを目標とした。

表1 b組の5時間目にてた「必要な声」

	タイミング	励まし	謝罪・心配	全体把握	工夫
カウント いち、にー、さーん	はい、はい せーの いま 入って 出て 入るタイミング 出るタイミング 抜けて 背中を押す	だいじょうぶ どんまい おしいよ がんばれ 次やる いけるよ いいよ ナイス	どうした ごめんね	つめて もう少し前に出て はやくはやく もう少し跳んだほうがいいのかも	順番を変える 縄の位置を低くする

最後はいつも通りふり返しシートの記入に加え、社会的スキル測定のための「Kiss-18テスト」、そして単元のふり返しを行った。

5. 結果

表5-1は、授業前後の社会的スキル得点の変化である。全体のt値は-1.68* (p<0.05)、授業前と授業後では有意な差が認められ、プログラムが社会的スキル向上に有効であることが分かった。クラスごとの数値を比較したところ、a組の授業前の平均値は64.97 (SD = 10.48、N=30)、授業後の平均値は67.50 (SD = 12.25、N=30) となり、t検定による有意な差は認められなかったものの、2.53増加した。b組の授業前の平均値は62.66 (SD = 11.67、N=32)、授業後の平均値は68.29 (SD = 10.73、N=31) となり、t検定による有意な差は認められ、5.63増加した。

図18は単元における責任レベル得点の推移を示している。全体平均値は、25.1、29.5、24.1、30.6、34.0、34.8と推移し、1時間目と6時間目を比較すると9.7点増加した。a組の平均値は、25.3、30.9、35.2、36.0、36.7、36.6と推移し、1時間目と6時間目を比較すると11.3点増加した。b組の平均値は、24.9、27.9、12.9、25.6、31.4、33.1と推移し、1時間目と6時間目を比較すると8.1点増加した。b組は3時間目にまとまりがなくなり、指導を入れる場面もあったため、そこで大きく得点が下がったが4時間目以降持ち直し、最終的には1時間目より得点を伸ばした。いずれの群も1時間目と6時間目の平均得点でt検定を行ったところ、有意な差が認められた。

責任レベル得点の変化と自由記述の個人分析を行った結果、生徒の学習パターンを4つに分類することができた。なお、6時間中4時間の授業に参加した59名を分析の対象とした。図5-3は各タイプの代表的

表2 授業前後の社会的スキル得点の変化

	授業前		授業後		t 値
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
全体	63.77 (11.17)	67.90 (11.51)	-1.68	*	
a組	64.97(10.48)	67.50(12.25)	-0.25		
b組	62.66(11.87)	68.29(10.73)	-1.63	*	

(*p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001)

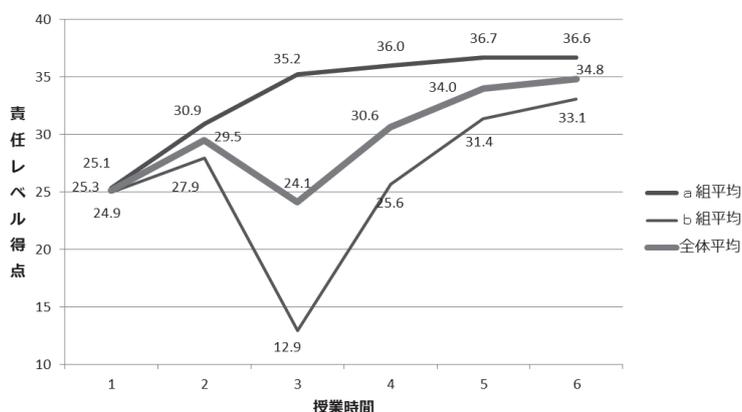


図18 責任レベル得点の推移

な責任レベル表得点の推移を示している。

Aタイプは、集団全体をみて行動する力が身につけており、集団に対して正しい指示を出せるなど高い能力を持っているリーダータイプである。2・3・4時間目のレベルの協力では物足りず、長縄という難易度が高い課題で力を発揮するという傾向もみられた。

Bタイプは、学習内容を理解し活動に取り組むまじめな性格をしており、段階的にじっくり学習する点と特徴である。図5-3が示すように、責任レベル表得点の変化の特徴は、平均の推移に近い波形を示し、右肩上がりの緩やかな上昇をする。自由記述においても、めあてに即した記述に加え、自身の考えを記すことで自分事としてとらえ学習する特徴がみられた。全体平均に近似した波形を示すことから、集団の中でも平均的な能力を持っていると考えられる。

Cタイプは、めあてや学習内容はあまり理解していないが、集団の空気によって変化する。集団の空気が良いときは引き上げられ急上昇する期待値を持つ一方で、集団の空気が悪い場合は急降下するという不安定さも合わせ持つ。思ったことをそのまま言葉にできるタイプでもあるため、集団に与える影響は大きい。今回の授業では、集団が段階的に良い方向へ成長したため、Cタイプを引き上げることができたが、上手く行かなかった場合はこのCタイプは集団に対して悪影響となる行動をとる恐れもあるだろう。

Dタイプは、Cタイプと似た特徴をもつ。大きな差は、集団の空気の影響を受けにくい点である。Cタイプは集団の空気次第で変化するが、Dタイプは集団の空気では変化しない。また、Cタイプより気分屋で目先の楽しさがその日の判断基準となる。図5-3が示すように、責任レベル表得点の変化の特徴は、自由記述で「楽しい」という言葉がみられるときは得点も高く、「もっと〇〇したかった。」など否定的な言葉がみられるときは得点も低く、規則性のない波形を示す。

それぞれの特徴から4つのパターンに分類したが、どのタイプも責任レベル表得点は向上するという共通点が見られた。一人ひとり過程は違っても、自分なりの方法で学習することが考えられる。

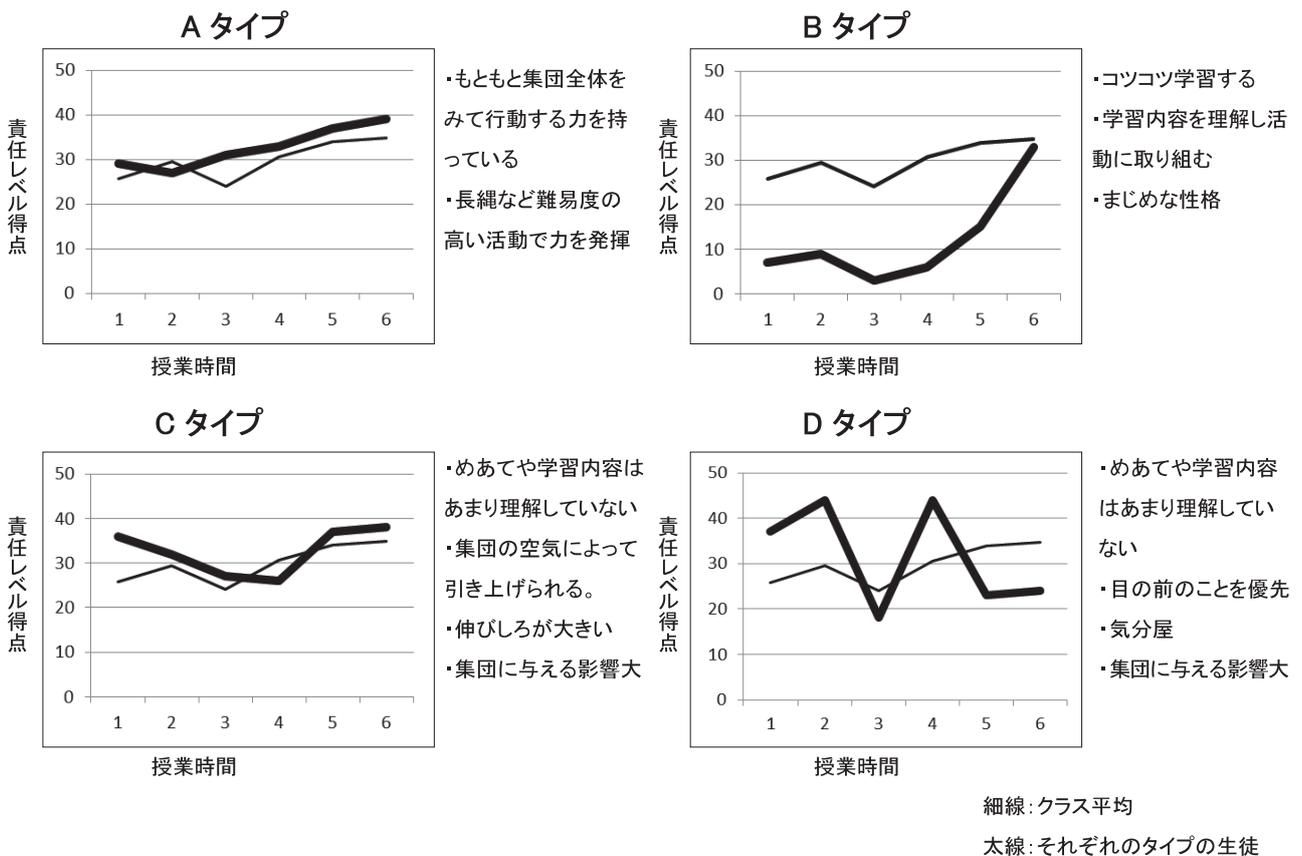


図 19 学習パターンの例

生徒の学習パターンの結果から、各クラス集団におけるそれぞれのタイプの割合を求めた。図5-4はその結果を示している。全体はAタイプが32%、Bタイプが38%、Cタイプが20%、Dタイプが8%であった。a組はAタイプが34%、Bタイプが51%、Cタイプが7%、Dタイプが7%であった。b組はAタイプが30%、

Bタイプが26%、Cタイプが33%、Dタイプが10%であった。

全体の特徴として、AタイプとBタイプが7割を占めるため、まとまりのある落ち着いた集団であると言えるだろう。

a組はb組と比較して、Bタイプの割合が高く、Cタイプの割合が低いことが分かる。Bタイプが集団の5割を占めているため、まじめでコツコツ学習する傾向があると考えられる。また、割合に偏りがあるためAタイプとBタイプの言動が集団に対して大きな影響を及ぼすことが考えられる。

b組はa組と比較して、Cタイプの割合が高く、Bタイプの割合が低いことが分かる。Cタイプが多いため、集団として危うく安定性はないが、AタイプとBタイプが上手くCタイプを引き上げることが出来れば、集団として大きな力を発揮するという期待が持てると思われる。

単元の感想では、「これまでにストレッチや背中合わせ、背筋でボールをよける運動、ボールをつく運動、4人組でのじゃんけん、背中合わせのリレー、そして長縄を通して『体づくり運動』を学習してきました。これまでの学習の感想を自由に書いてください。」とし、自由度を持たせたものにした。a組の感想(30名分)を対象として分析を行った結果、「運動の楽しさを実感した」とみられる記述は73%あった。

6. 考察

本研究の目的は、「生徒の社会性を育成する要因を明らかにし、運動の楽しさや喜びを実感させることで、生涯にわたって運動に親しむ態度を育成する」であった。

事例的な結果として、本研究では以下のことが示された。すなわち、第1に、責任学習モデルに基づいた体育授業は生徒の社会的スキルを高めたこと、第2に、生徒の社会性を高めることが運動の楽しさを実感することであった。その要因を、授業戦略と集団の学習力より考察する。

まず、生徒の社会的スキルを高めた要因として考えられるのは、社会性の向上につながる適切で段階的な学習過程がある。結果で示したように、責任レベル表得点の平均値の推移が徐々に右肩上がりに上昇した。これより、生徒が毎時間学習を積み重ね、段階的に学習したのではないかと考えられる。本研究は、生徒が段階的に学習できるように、いくつかの授業戦略を施した。その授業戦略は、①社会的スキル向上のねらいの設定、②活動人数を徐々に増やしたこと、③ねらいと生徒の実情に沿った教材の選定である。授業戦略としてのねらい、活動人数、教材の順次性が、生徒の社会性に関する段階的な学習を促し、生徒の社会的スキル向上が認められたのではないかと考えられる。

次に、生徒の社会的スキルを高めた要因として考えられるのは、試行錯誤を繰り返す学習集団であったことである。生徒が試行錯誤を繰り返して課題に挑戦できるように、①課題設定は教師が行うが方法などの内容は生徒に委ねること、②集団に応じた授業戦術を施したことを行った。このように、集団に適した授業戦術を施すことで学びの方向付けが行われ、集団の社会性を高めたことが示唆された。

最後に、体育の授業を通して運動の楽しさを実感できた要因として、必要な声を出し協力して課題を乗り越えることで達成感と喜びを仲間と共有できたことが考えられる。個人の社会的スキルが高まったことで、集団の社会性が向上し、仲間と協働できたことが、運動の楽しさに結び付いたと考えられる。できそうでない課題に対して、仲間と協力して何度も挑戦したことが、大きな達成感を生み、その達成感が楽しさにつながったことが示唆された。

おわりに

本研究の目的は、「生徒の社会性を育成する要因を明らかにし、運動の楽しさや喜びを実感させることで、生涯にわたって運動に親しむ態度を育成する」であった。

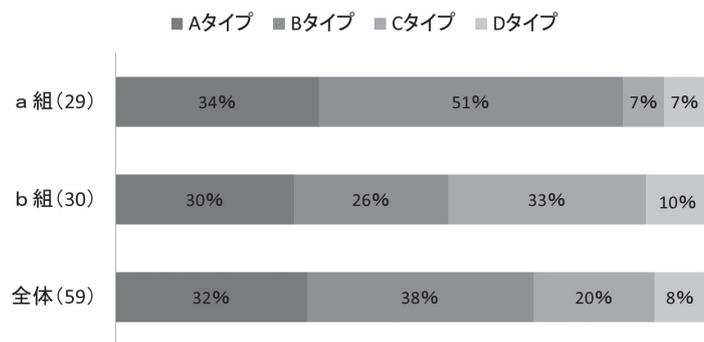


図20 各クラスにおける学習パターンの割合

事例的な結果として、本研究では以下のことが示された。すなわち、第1に、責任学習モデルに基づいた体育授業は生徒の社会的スキルを高めたこと、第2に、生徒の社会性を高めることが運動の楽しさを実感することであった。

しかしながら、本研究においては次の課題が残された。研究の目的である生涯にわたって運動に親しむ態度を育成するためには、運動の楽しさを実感できる授業を継続して行う必要がある。本研究は社会性の向上に効果がみられた長縄をはじめとする仲間と協力する運動を仕組みやすい「体づくり運動」の領域で行った。社会性を高め、運動の楽しさを実感できる授業を継続して行うためには、「陸上競技」や「水泳」、「球技」など体育科の他の領域でも同様の授業を仕組む必要がある。さらに生徒の学習パターンを4つに分類し、相互の影響が学習に大きな影響を及ぼすことが示唆されたが、他の領域で各タイプがどのような働きをするかは不明である。また、他の領域における検証を行うことができなかったため、他の領域で生徒の社会性を育成し、運動の楽しさや喜びを実感させる授業づくりが今後の課題である。

参考文献

- Hellison, D. : Teaching Responsibility Through Physical Activity 2nd. Human Kinetics, 2003
- 菊地章夫：思いやりを科学する 川島書店 1988年
- 梅垣明美, 友添秀則, 小坂美保：体育における人格形成プログラムの有用性に関する研究, 体育科教育学研究 22(2), pp11-22, 2006年
- 梅垣明美, 草島進之介, 上谷浩一：中学校における責任学習モデルの効果に関する実践的研究, 体育学研究 56, pp157-172, 2011年
- 梅垣明美：責任学習モデルの体育授業への適用過程とその成果, 体育科教育学研究 31(2), pp56-61, 2015年
- 梅垣明美, 大友智, 南島永衣子, 上田憲嗣, 深田直宏, 吉井健人, 宮尾夏姫：中学校の体育授業におけるTPSRモデルの効果の転移及び保持に関する検討, 体育学研究 61(2), pp503-516, 2016年
- 梅垣明美, 大友智, 南島永衣子, 上田憲嗣, 深田直宏, 吉井健人, 宮尾夏姫：中学生の体育授業を対象としたチームビルディング学習の開発とその有効性の検討, 体育科教育学研究 32(2), pp1-18, 2016年
- 梅垣明美, 大友智, 上田憲嗣, 深田直宏, 吉井健人, 宮尾夏姫：社会的スキルの向上を促す体育における指導モデルの検討：チーム編成の形態に着目して, 日本体育学会第68回大会口頭発表資料, 2017年
- 梅垣明美, 大友智, 上田憲嗣, 深田直宏, 吉井健人, 宮尾夏姫：社会的スキルの向上を促す体育における指導モデル(ASKSモデル)の検討：チーム編成に着目して, 体育学研究(早期公開), 2017年
- 田熊美保：将来、必要とされる力をどのように育むか 新しい教育のあり方を追求する“Education 2030”, リクルートカレッジマネジメント 198 / May - Jun, 2016年
- 文部科学省：中学校学習指導要領解説保健体育編, 大日本図書, 2017年
- 友添秀則, 高橋建夫, 岡出美則, 岩田靖：体育科教育学入門, 大修館書店, pp35, 2010年